
ヒカルの暮 神の一手を極めし者

ソウルメイジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒカルの暮 神の一手を極めし者

【Zコード】

Z9957Z

【作者名】

ソウルメイジ

【あらすじ】

ヒカルと別れた佐為はある日突然再び現世へと舞い戻り、ある碁盤に宿る。

その碁盤をもつじいさんの孫であるユウはひょんなことで、幼なじみの小雪とともにじいさんの家に行くことになる。

そこで、その碁盤を見たユウは、ヒカルと同じようにサイと出会い、そこから物語が始まる。

あまり、うまくはできないかもしませんが、見ていただけますれしいです。よろしくお願ひします

サイとの出会い

「結局、神童ヒカルも神の一手には届きそうにない。あの段階ではまだはやかったのだろうか？塔矢アキラも届かぬであろう。これでは私がつまらない。佐為、いま一度そなたを現世へと向かわせる。また新たな私への挑戦者・・・神の一手を極めし者を導いてくれ・・・」

あれ？私はなぜまたココにいる。私の役目はもう終わったはずだ。だからあの時私はヒカルの前から姿が消えた。ならばなぜ再び私はココにいる。

人のいる現世に・・・

どうして私は再びどこの誰のものかもわからない碁盤に宿っているのだ？

わからない、だがきっと神様が再びこちらへ来てもいいと、そう思われたのだろう。

だったら、また私は待つ。虎次郎やヒカルのように、私を見つけてくれる人が来る日を・・・

「・・・きて・・・ねえ、起きてってば」

「・・・はっ！、おい、テストは？」

「とにかくに終わったわよ、バカねえ、なんでテスト中に爆睡なんて

するのよ」

しまつたあ、今日は眞面目に受けようと思つていたのにいと早坂ユウは後悔していた。

「あんた、補習行き確定ね」

「そういう小雪だつて、いつもま・じ・めにテスト受けてても補習ばつかじやん」

「あんただつてかわんないでしょ」

「そんな事ねえよ、俺はテスト今日みたいに眞面目に受けねえから補習なんだよ。お前と一緒にすんな」

今発言にイラッと来た小雪がユウの席の机をバンと叩く。

「結局補習なんだから一緒にやないつ！」

それに負けじとユウも椅子から立ち上がって反抗する。

「一緒にねえよ、俺がテストを眞面目に受けたら補習はあるか、学年で一桁取れる点数だつてとれるぜ」

「いつたわねえええ」

「ああ、いつたぜ」

白熱した二人の仲に、一人のクラスメイトが

「おいおい、夫婦漫才はその辺にしておけよ」

といい、クラス中に笑いが起こった。

だが、一人はまだ納得できていよいよ、フンッとお互いにそっぽを向いていた。

その日の授業が終わるころには一人はすっかり仲直りして、元の仲のいい二人の戻っていた。

というのも、この二人は家はとなり通しで、幼稚園そして、今通っている小学校でも6年間で一度もクラスが違わなかつたというほど何もかもが一緒なのだ。

家が隣ということは当然下校も同じ道になる。せりてユウと小雪の

地域には6年生がユウと小雪二人しかいないため、一人での下校も当たり前となっていた。

いつものようにランドセルをもつた小雪がユウの方へとやつてくる。「ユウ、帰る」

満面の笑顔でユウに向かつて微笑みかける小雪。

「悪い、今日はちょっとジーちゃんのところにいひとおもつてゐるんだ」

「ふーん、そうなんだ。じゃあ、私もつれてつて」

さも、当然のように自分もつれ行くよつに言つ小雪。

「なんでお前、ジーちゃん家なんて行きたがるんだ?」

「最近、顔だしてなかつたし、せつかくユウが行くんだつたら私もいこうかなつて思つてさ」

ユウのおじいちゃんである早坂源次郎の家は、ユウの家から歩いて5分という位置にある。源次郎は、誰にでも愛想がよく、幼稚園のころからユウとよく遊んでいた小雪は毎日のように源次郎にの家に顔を出していた。当然ユウも一緒に、だ。だが、最近では学校も忙しく、しばらくお互い顔を出していなかつたのだ。しばらく考えた後で、特に問題ないと見たユウは

「じゃあ、行くか」といつた。

それに続いて小雪も笑顔で

「うんつ！」

とうなずいた。

外は6月だといつのに夏本番といったよつに暑かつた。

その暑さに耐えながら一人は学校からしばらく歩き、よつやくユウと小雪は源次郎の家に到着した。

久しぶりだったからとつて特に道に迷つことなくすんなり来ることができたのは、本当に幸いだつた。

ユウがチャイムを押すと、中から、「はーい、今行きます」としゃがれた声がユウたちに聞こえ

その声は、小さいころから何も変わっていない、優しい声だつたので一発でその声の主が源次郎だと一人はわかつた。

声が聞こえて数秒後、ガラガラとドアが開いた。

そこから姿を現したのは、身長はやや小柄で前かがみになつていて、髪の毛が見事に真っ白な

おじいさんが立っていた。源次郎だ。

源次郎は二人の顔を見ると、すこし驚いたようだつたが、それでも優しい表情はくずさずに

「おお、ユウ、それに小雪ちゃん。いらっしゃい。」と言った。

それに対しても

「ただいま、ジーちゃん

「こんにちわ」

とあいさつ。

「うちにお入り。外は暑かるう。アイスをだしてやる。」

その言葉を耳にした一人は、

「やつたぜ」

「やつたあ、うれしい」と口ぐちに喜びを言葉にしながら中に入つた。

家に入つてユウと小雪はリビングに、源次郎は台所へと向かつた。リビングについた一人が目にしたのは、碁盤だつた。

テーブルが部屋の真ん中に置いてあつて、そのすぐ右隣りに碁盤がカバーをかぶせられておいてあつた。

今まで、この家に来たときにそんなものがあつた記憶の無い一人に

とつてこれは、大きな驚きだつた。

と、同時に疑問でもあった。ジーちゃんへおじいさん》の家にこんなものあつたかな?と。

しかし源次郎が台所からアイスを取つて一人のもとへ来ると一人はすぐにそんな事なんか忘れて、アイスへと走つていった。

真ん中に広がる6人はすわれそうなでかい机でアイスを食べ終えるとさつきの疑問が再びユウの頭をよぎり源次郎にその疑問をぶつけることにした。

「ジーちゃん、この台つたい何に使うの?」

「ああ、それはのう、碁盤というもののじゃ。そのカバーをとつてみい」

そういうつて碁盤をさす源次郎。碁盤のことをなにもしらないユウは恐る恐る碁盤のカバーを取つた。

すると、そこには無数の傷のついたますめ36一ある一般用の碁盤があつた。

「ボロボロじやん。なんでこんなものにカバーなんてかけてるんだよ」

すると、小雪と源次郎はユウが何を言つてるのかわからないと言つた表情を浮かべた。

「何を言つておるんじやユウ。この碁盤は先週買った新品じやぞ。ほらこの通りピカピカではないか」

そういうつてもう一度カバーを取る源次郎。

しかし、ユウにはどこをどう見ても古びた無数の傷をもつ碁盤にしか見えなかつた。

すると、突然、ユウの心の中にある声が聞こえた。

「この碁盤がボロボロにみえるのですか

「だからそういうてるじやん」

あなたには私の声がきこえるのですか

えつ!とユウは思つた。今のはいつたい誰だと。

私の声が聞こえるのですね

ユウは不安になつて「誰だつ!?」と声を上げた。

ユウその様子に小雪と源次郎は不審感を抱き

二人して懸命に「ユウどうしたのじゃ」

「どうしちゃったの、ねえユウってば」と叫んでいる。

しかし、その声がユウに届くことはない

見つけた。ようやく見つけた。

どこか喜んでいるかのように聞こえるその声。ユウの不安はさらに

増し、同時に身構える。

その様子を冷静に、見た源次郎は

「救急車じゃ。救急車を速くつ！」と小雪に叫ぶ。幻聴を聞いていると思つていいのだ。

あまねく神に感謝します。

すると、急に碁盤が光だし（ユウにしか見えていない）ある一人の

男の姿が、ユウの前に現れた。

そこで、ユウは氣を失つた・・・。

サイとの玉露ご（後書き）

どうでしょつか？ヒカルの暮 神の一 手を極めし者 楽しんでいた
だけたでしょうか。

また、まだまだ初心者で拙い部分もあるかと思いますが、
頑張つていこうと思つています。よろしくお願ひします。

プロフィール

年齢	12歳（小学6年生）	年齢	12歳（小学6年生）
身長	147cm	身長	147cm
体重	36kg	体重	36kg
特徴	髪の毛は少し長めで左腕にミサンガをしている。 運動が得意 勉強が苦手	特徴	髪の毛は少し長めで左腕にミサンガをしている。 運動が得意 勉強が苦手
嫌いな食べ物	オムライス	嫌いな食べ物	オムライス
家族構成	ひとりっ子、両親は健在	家族構成	ひとりっ子、両親は健在
パ	父親は部長 母親はヘル	パ	父親は部長 母親はヘル
？名前	夢咲 小雪	？名前	夢咲 小雪
年齢	12歳（小学6年生）	年齢	12歳（小学6年生）
身長	139cm	身長	139cm

体重 ひ・み・つ?

特徴

ユウの幼なじみ。ユウとは逆で右腕にミサンガをついている。

ポニー・テルで、気が強い。

好きな食べ物 基本的に甘いものなら何でもOK

嫌いな食べ物 しょうが、漬物 梅干し

家族構成 妹が1人両親ともに健在。父親は単身赴任

中

母親は主婦

? 名前

早坂 源次郎

年齢 63歳

身長 148cm

体重 43?

特徴 髪の毛が真っ白。小柄で、頭がキレる。暮の経験あり。

年中にこにしている

好きな食べ物 刺身、漬物

り。

嫌いな食べ物

カレー、ハンバーグ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9957z/>

ヒカルの暮 神の一手を極めし者

2011年12月30日23時46分発行